

Title	明朝の檔案に就て
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.2/3 (1939. 11) ,p.329(515)- 360(546)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	占部博士古稀記念號
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19391100-0329">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19391100-0329</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 明清の檔案に就て

宮 島 貞 亮

(一) 序 言

(二) 檔案の分類

(三) 内閣大庫檔案

(四) 軍機處檔案、内務府檔案、及宮中檔案

(五) 結 語

(一) 序 言

清末以來幾多の新資料が發見され、前古其比を見ずといふも強ち過言ではない。されば今は亡き海甯王國維氏も次の如く言つてをられる。「光宣之間。我中國新出之史料凡四。一曰殷虛之甲骨。二曰漢晋之簡牘。三曰六朝唐五代之卷軸。而内閣大庫之元明及國朝文書。實居其四。」註一

近年出づる所の資料は此に止まらず、其考訂の業も漸く崛起ならんとしてゐる。寔に輓近四十年は石田幹之助氏の言はるる如く、中國學界に於ける一の“*Zeitalter der Entdeckungen*”をなすものであつて、

世界の支那學界に幾多の前古未知の新資料を提供し、其驚くべき進展を促したことは學界周知の事に屬する。「註二」

余が燕京遊學の時、唐代長安與西域文明の著で知られてゐる向達氏が、北京大學に於て近四十年中國史學上之新發現の題目の下に所謂甲骨學、敦煌學、檔案學等を講じてをられた。

近代中國の史料は繁多で、浩として煙海の如き觀がある。その資料として、政書、碑傳、文集、信件、日記、年譜、禁書、新聞雜誌、時人の記載になるもの等、寔に尠くない。「註三」就中各種の明清檔案は新資料の中、最も重要なもので近來我國の學者も大いに注目するようになった。余も四、五年前、北京の文獻館、北京大學の明清史料整理室、大連の大庫史料整理處等を見學した際、各種の檔案に接し、尠からず興味を覚え、爾後絶えずこの問題に意を留めるようになった。以下明清の檔案に就て述ぶることにする。

「註一」 王國維「庫書樓記」觀堂集林卷二十三所收

「註二」 石田幹之助氏「最近に於ける支那の支那學」「支那」第十七卷第四號（大正十五年四月）所載

「註三」 陳恭祿「近代中國史史料評論」國立武漢大學文哲季刊第三卷第三號（民國二十三年）及び同氏著「中國近代史」參照

檔案は宮廷及び官邊の古文書、古記録の總稱である。歴代檔案中最も名のあるは明清の檔案で、この檔案を検討する學が所謂檔案學である。

檔案は正に一等史料、根本史料ともいふべきもので、民國十二年七月、北京大學がその入手した内閣大庫檔案の整理、同じく十五年二月故宮文獻館が軍機處檔案の整理を開始するや、漸く中國史學界は檔案の重要性を認めるようになり「註一」、我が國に於てもいち早く大正十五年四月、石田幹之助氏が「支那」に掲載された「最近に於ける支那の支那學」中に於て内閣大庫の檔案に言及された。

中國歴代の史乘は大率官書であり、従て歴代の檔案は史料の大宗ともいふべきものであるが、特に明清檔案に至つては大體よく整齊され、政治、軍事、社會經濟乃至文化各般に亙る根本史料なるが故に、明清の檔案は近代史史料の白眉といはなければならぬ。而してこの檔案の種類は繁夥、皇帝或は太后の諭旨、大臣の奏疏、咨文、佈告、外交官の往來照會の公文書等皆之に屬する。

次にこの莫大な數に達する檔案の分類が問題となつてくる。内閣大庫檔案、軍機處檔案、内務府檔案、宮中檔案と大別するのが普通であり、又北京大學研究所、歴史語言研究所、及び文獻館の分類法もあるが、ここにはその著清内閣庫貯舊檔輯刊を以て知られてゐる方甦生氏の分類法を左に掲げる。「註二」

#### (甲) 宮中檔案

#### 一、奏摺

1 康熙朝奏摺

2 雍正朝奏摺

3 乾隆至咸豐奏摺

4 同治至宣統朝奏摺

二、請安摺

三、履歷單

四、貢單

五、雜單

六、檔冊

1 檔 (如奏事檔、依都檔等)

2 冊 (如贓罰報銷冊等) 「註三」

3 簿 (如日記帳簿等)

4 錄 (如晴雨錄題名錄等)

七、另存檔案

1 懋勤殿檔案

- 2 景仁宮檔案
- 3 慶壽堂檔案
- (乙) 軍機處檔案
- 一、檔案
- 二、摺包
- 三、雜件
- 1 圖(如地圖)
- 2 書
- 3 函札
- 4 電報
- 5 照會
- 6 表章
- 7 咨文
- 8 清冊
- 9 奏稿

明清の檔案に就て(宮島)

10 堂稿

(丙) 內務府檔案

一、內務府堂檔案

1 紅本

2 奏摺

3 奏稿

4 呈稿

5 事筒

6 來文

7 檔冊

二、昇平署檔案

1 劇本

2 曲譜

3 題綱

4 串頭

5 排場

6 戲箱物品

7 檔案、復分檔冊、摺片、單、戲摺、雜品五類

8 雜曲

9 樂章

### 三、造辦處輿圖

1 目錄

2 輿地

3 河道

4 江海

5 武功

6 巡功

7 名勝

8 瑞懷

9 效貢

明清の檔案に就て(宮島)

(三)

三三五



10 寺廟

11 山陵

12 風水

(丁) 清史館檔案

一、各處咨送之文件

二、借調各處之文件

三、鈔錄之文件

四、自編之稿件

(戊) 刑部檔案 未整理

(己) 內閣大庫檔案

一、內閣承宣或進呈之官文書

1 制、詔、誥、勅、諭、旨

2 題、奏、表、箋

3 圖、冊、單、籤

二、帝王言動之記載

1 起居注

2 六科史書

三、官修書籍及其文件

1 官書

2 稿本

3 各館檔案

四、因修書而徵集之參攷材料

1 明代檔案

2 奏摺

3 部院鈔送文件

4 各省鈔送之文件

5 軍前將軍府文檔

6 圖書

五、內閣日行公事之檔案稿件

1 內三院檔

明清の檔案に就て (宮島)

2 典籍廳檔

3 滿本堂檔 附皇史宬檔

4 漢本堂檔 附誥勅房檔

5 蒙古堂檔

6 滿票籤處檔

7 漢票籤處檔

8 稽察房檔

### 六、瀋陽舊檔

1 滿文老檔

2 滿文檔簿

3 滿文文件

4 漢文檔簿

5 漢文文件

6 滿文木牌

「註一」 文獻館大事表（文獻論叢所收）及び整理内清閣檔案之始末（國學季刊第一卷第一號）参照

「註二」 方甦生「清代檔案分類問題」(文獻論叢所收) 參照

「註三」 檔案中所謂報銷冊なるものがある。人口、物品、租税に關係した記録多きを以て經濟史研究の絶好の史料といふことが出来る。北京大學研究所國學門明清史料整理會編印にかゝる清九朝京省報銷冊目錄(第一冊順治、康熙) 參照

### (三) 内閣大庫檔案

内閣大庫は午門内の東南隅にあり、今日文獻館に屬する。大庫は兩庫を有する。一は紅本庫、俗に西庫と稱し、他は實錄及び書籍表章庫、俗に東庫と稱する。この内閣大庫に歴代の公文書が多く積藏されてゐたのである。即ち宋元の古刊本以下多くの圖書及び主として明清の宮廷及び官邊の古文書、古記録の類とが尠からず收藏されてゐて、その書籍は多く明の文淵閣の藏儲を引繼いだものである。然るに、その文書、記録類に至つては清朝歴代皇帝の殊諭、勅諭、内外臣工の黃本、題本、奏本、外藩屬國の表章、歴科殿試の大卷及び其他三百年間の檔冊文移などが多く儲藏され、往々にして元明の遺物も亦その中より發見されたのである。「註一」

案内閣典籍廳大庫。爲大樓六間。其中書籍居十之三。案卷十之七。其書多明文淵閣之遺。其案卷則有列朝之殊諭勅諭。内外臣工之黃本・題本・奏本。外藩屬國之表章。歴科殿試之大卷。其他三百年間檔冊文移。往往而元明遺物。亦間出其中。蓋今之内閣。自明永樂至於國朝雍正。歷兩朝十有五帝。實爲

## 萬幾百度從出之地。

## 王國維「庫書樓記」

これによつて如何に大庫が近代史料の寶庫であるか略識ることが出來よう。殊に機密の文書及び外間の窺知を許さぬ事項を傳へた記録の多いことに、一層その價值を昂むるに至つた。然しそれはその性質上、近三百年間舍人や省吏の輩が單なる事務として目錄を編する爲に之に接する外、學士大夫と雖も殆どその美富を窺ひ知ることが出來なかつた。註二然るにその後、次の事情により一般に知らるるようになった。即ち宣統元年、大庫が破損したため之を修繕することとなつた。そこでその文書類は一時文華殿の兩廡の下に移されたが、その地域が狹隘のため全部置ききれず、その垣内に露積してをいたものもあり、始めて人々の注意を稍ひくことになつたのである。註三

宣統元年。大庫屋壞。有事繕完。乃暫移於文華殿之兩廡。地隘不足容。其露積庫垣內者尙半。外廷始稍稍知之。

「庫書樓記」

時に南皮の張文襄公（之洞）は之を知り、上奏してその書籍類を以て京師圖書館（後の北平圖書館）を設立し、古文書、古記録の類は概して不用のものであるから之を焚燬せんことを請ひ、既に御裁可を得たのである。然るに當時偶々學部の參事であつた上虞の羅振玉氏が内閣に赴き、これらの古文書類を一見して大いに驚かれ、その極めて貴重の文籍であることを張之洞氏に説いて焚燬の擧を罷めて貰ひ、その保管を學部に移し、その大部分を國子監の南學に藏し、又歷科殿試の榜目を記した書卷は學部の大

堂の後樓に收藏された。その後間も無く都合によつてこれらは皆午門の樓上に設けられた所謂歴史博物館に移された。「註四」

時南皮張文襄公。方以大學士軍機大臣管學部事。奏請以閣中所藏四朝書籍。設學部京師圖書館。其案卷則閣議概以舊檔無用。奏請焚燬。已得俞旨矣。適上虞羅叔言參事。以學部屬官赴內閣。參與交割事。見庫垣中文籍山積皆奏準焚燬之物。偶抽一束觀之。則管制府幹貞督漕時奏摺。又取觀他束。則文成公阿桂征金川時所奏。皆當時歲終繳進之本。排比月日。具有次第。乃亟請於文襄。罷焚燬之舉。而以其物歸學部。藏諸國子監之南學。其歷科殿試卷則藏諸學部大堂之後樓。辛壬以後。學部後樓及南學之藏。又移於午門樓。所謂歷史博物館者。

「庫書樓記」

その後この文書は約十年間、この場所で安定であつたが、この博物館の經費が缺乏したため、民國十年の冬、之を整理して金に代へることとなり、可惜無慮九千麻袋、十五萬斤といふその所藏の四分の三に達する至貴の品物を銀四千元で紙屑商同懋増に賣却したのである。翌民國十一年の春、羅氏は事を以て北京に赴いて此の事實を發見し、百方搜索の結果屑商同懋増に存することを探知した。そこで直ちに之に就て尋ねると、將に處分せんとする際どひところで漉き返し紙（還魂紙）にするため既に一部は數車に積んで西山に運んだといふ話なので、氏は京津間を奔走して言ひ値の銀一萬三千元を以て之を購ひ返した。ここに舊檔類は再び災厄を免れたのである。「註五」

越十年。館中資費絀。無以給升斗。乃斥其所藏四分之三。以售諸故紙商。其數以麻袋計者九千。以斤計者十有五萬。得銀幣四千圓。時辛酉冬日也。壬戌二月。參事以事至京師。於市肆見洪文襄揭帖及高麗國王貢物表識爲大庫物。因蹤跡之。得諸某紙鋪。則庫藏具在。將毀之以造俗所謂還魂紙者。已載數車赴西山矣。亟三倍其直償之稱貸。京津間得銀萬三千圓。遂以易之。於是此九千袋十五萬斤之文書。卒歸於參事。

## 「庫書樓記」

かくて莫大な舊檔類を買ひ戻した羅氏は或は彰儀門の貸棧に堆置したり、或は商品陳列所の大樓に委託したり、或は善果寺の餘屋に搬入したりしたが、その處理に窮した結果、天津に寓居するの故を以て、特に庫書樓を闢き舊檔類を積藏することとなつた。註六さればこそ王靜安氏はその庫書樓記中に「余謂此書瀕燬者再。而參事再存之。其事不可謂不偶然。固非參事能存之也。國朝祖宗聖德神功之懿。典章制度聲名文物之盛。先正訐謔遠猷之富。與夫元明以來史事之至蹟至隱。固萬萬無亡理。天特假手於參事以存之耳。然非篤於好古如參事者。又烏足以與於斯役也。」と羅氏を稱揚したのも怪しむに足りない。

羅氏は庫書樓を闢くや、私人の力を以て分散した舊檔類の蒐集に努むると同時に、その收藏せる舊檔の一部を順次に整理して之を「史料叢刊初編」と名付け、二十二種を十冊となして東方學會から印行した。(民國十三年)註七清初の罕に見る史料を多く収録してゐる。その自序の一節に云ふ。「壬戌春。予既得大庫史料。謀籌金築館以貯之而力未逮。乃權賃僧寺。暫安置之。充閭塞牖。不可展閱。而四方友人。

多移書問其中所有。苦無以懷。乃運其少半至津沽。以數月之力。檢理其千百之一二」と。老儒の力を用ゆる寔に人を驚かすに足る。

其の後私人の力を以てする所謂檢理工作の困難に逢著したものが、「外人且重金求讓」註八の力に動かされたものか、學界に燃ゆるが如き熱意を有してゐた流石の羅氏も、天津の中國有數の藏書家李世鐸氏に一萬六千元で舊檔類を讓渡した。越えて民國十七年、國立中央研究院歷史語言研究所が設立され、同年十二月、馬叔平、陳寅恪兩氏の斡旋により一萬八千元でこの舊檔は李氏から研究院に讓渡された。「註九」民國十九年、研究院から印行された明清史料(十冊)は讓渡された舊檔を整理したものである。内閣大庫の舊檔類は羅氏の買ひとつたものに盡きるのではない。大庫及び歴史博物館に残つてゐるものが尠からずあつたのである。歴史博物館に堆積し比較的よく整齊されてゐた舊檔類は、これよりさき民國十一年、當時の北京大學の校長蔡元培氏及び沈兼士教授(國學門主任)の希望によつて、六十二箱、千五百二麻袋、北京大學研究所國學門に儲藏されることとなつた。これが北京大學明清史料研究會の檔案である。その整理については「整理清內閣檔案之始末」(國學季刊第一卷第一號)中に詳述されてゐる。北京大學明清史料整理會から清九朝京省報銷冊目錄、同大學國學門から清嘉慶三年太上皇起居注、順治內外官署奏疏等の影印本が出版されてゐる。

羅氏の收藏せられた内閣大庫の檔案は、既述の如く天津の李盛鐸氏に讓渡され、更に中央研究院に轉



賣されたが、分散せる檔案の蒐集に努められた羅氏のこととて、それらは儲藏の一部に過ぎず、積藏された舊檔類は夥しい數量に上つてゐたものと察せられる。従つて自ら羅氏所藏の大庫史料の整理が問題となつてきた。曩に獨力で史料叢刊初編を印行された氏は、私人の力を以て整理することの不便を悟り、遂に旅順に庫籍整理處を闢き、滿洲國文教部及び我が外務省文化事業部の後援の下に内閣大庫の史料を整理されることとなつた。松崎鶴雄氏がその主任となり、何耐庵、羅福頤諸氏が之を補佐し、その整理は民國二十二年秋より開始された。約四年後迄に、大庫史料目錄(六冊)が庫籍整理處から編印され、その他明季史料零拾、國朝史料零拾、史料叢編、太祖高皇帝實錄等貴重な史料が續々刊行されたのである。既述の如く故都の内閣大庫には未だ移出されざる檔案は尠らず收藏されてゐたのである。これらは故宮文獻館に保管され、數量からいへば北京大學及び中央研究院所藏のものよりも遙かに多い。

以上敘述した外、大連滿鐵圖書館にも内閣大庫檔案が少しく收藏されてゐる。されば分散して私人に收藏されてゐる内閣大庫檔案の數量は相當あるものと考へられる。要するに事變前まで大體內閣大庫檔案は、故宮文獻館、旅順の庫籍整理處、中央研究院歴史語言研究所及び北京大學の四個所に收藏されてゐたのである。以上は内閣檔案の由來である。

明清檔案の主要部分は文獻館に保管されてゐるが、内閣大庫檔案が最も多い。民國二十年一月、内閣大庫檔案の整理が開始され、館長沈兼士氏及び館員劉官諤、單士元、楊學文諸氏の努力で整理の成績大

いに觀るべきものあつた。開始早々二月には清の未だ入關しない前の滿文老檔及び太祖武皇帝實錄、同三月に鄭成功の部曲（部下）を招降する勅書、四月に朝鮮檔冊、五月に康熙朝三藩に關する文件、十一月に明の永樂勅書、景泰實錄、及び天啓年兵科史書の文件を夫々内閣大庫檔案中から發見した。註十 文獻館所藏の内閣大庫檔案整理は開始後一年間に大いに進捗したのである。即ち次の如く分別敘述することが出来る。註十一

### 一、紅本

各省督撫鎮按及び各部院の題本で、乾隆より光緒に至るまで凡三百一架、約三千五百餘捆。

### 二、史書

紅本の事柄、諭旨を摘記し、史、戶、禮、刑、工の六科に分ち、日月を按じて冊としたものを史書といふ。順治より光緒に至るまで、凡そ二十九架、約二萬四千餘本。

### 三、黃冊

報銷冊とも稱す。吏、戶、禮、刑、工、現藩院、都察院、太常寺、光祿寺等の衙門に分ち、計八十四類、共に二千九百九十八冊あり。如し兵部及び京外各省の黃冊を連ね計れば、その實數約五千冊に達する。此の中經濟史料最も多きことは、報銷冊の註で述べた通りである。因に故宮文獻館、北京大學研究院、中央研究院歷史語言研究所所藏の黃冊あり、その中戶籍に屬する

ものみにても八百餘冊に達する。「註十二」

四、勅書

明の永樂一件、清の天命一件、順治より宣統に至る約五百餘件

五、詔書

乾隆より光緒に至る約百餘件

六、摺件

明の天啓、崇禎及び清の順治、康熙各朝の題、奏、咨、啓等及び殘零摺件、編目ずみのもの約

二千五百餘件。

七、滿文老檔

原檔三十七本又重鈔本二部共に七百二十本、完全な書は僅かに七種、他は殘缺本。

八、書籍

百三種、間宋元の舊刊がある。殘缺本多し。

九、實錄

紅綾皮本、黃綾皮本に分つ、漢文二部、滿文一部、蒙文二部。

十、聖訓

紅綾皮本、黃綾皮本に分つ、計滿文、漢文各二部。

## 十一、起居注

康熙より光緒九朝に至る凡そ四千五百餘本。

〔註一〕 王梅莊「整理内閣大庫雜亂檔案記」(文獻論叢所收)、徐中舒「再述内閣大庫檔案之由來及其整理」(中央研究院歷史語言研究所集刊第三本第四分)、「庫書樓記」、石田幹之助「支那に於ける支那學」參照

〔註二〕 「庫書樓記」、「支那に於ける支那學」參照

〔註三〕 邵子風「大庫書檔」、「庫書樓記」、「支那に於ける支那學」參照

〔註四〕 「庫書樓記」、「大庫書檔」、「支那に於ける支那學」水野梅曉「大庫史料の整理に就て」參照

〔註五〕 「庫書樓記」、謝國楨「清開國史料考」、「大庫史料の整理に就て」參照

〔註六〕 徐中舒「内閣檔案之由來及其整理」參照

〔註七〕 「史料叢刊初編」中の太宗致朝鮮書、招撫皮島諸將諭帖、及天聰朝臣工奏議乃ち瀋陽故宮舊檔は内藤虎次郎博士の「清朝開國

期の史料附記(讀史叢錄所收)及び趙爾巽氏「滿洲老檔祕錄跋」參照

〔註八〕 徐中舒「内閣檔案之由來及其整理」參照

〔註九〕 「清開國史料考」、「内閣檔案之由來及其整理」參照

〔註十〕 「北平故宮博物院文獻館一覽」、「文獻館大事表」(文獻論叢所收)參照

〔註十一〕 故宮文獻館所藏明清檔案之整理(天津大公報)容媛「故宮文獻館所藏明清檔案之整理」參照

〔註十二〕 清代黃冊の種類は甚だ多い。戸口冊も其の一である。黃冊中の戸籍制度に關し王梅莊氏の有益な論文がある。「清代黃冊中之戸籍制度」(文獻論叢所收)、参考にその一節を掲ぐ。

明清の檔案に就て(宮島)

(五三)

三四七

清代黃冊。種類甚繁。戶口冊其一也。考黃冊名稱。淵源甚古。隋頒男女三歲以下爲黃之令。唐定男女始生爲黃之制。其後記載人口數目之籍。遂以黃名之。明代以戶籍上戶部者冊面黃紙。故曰黃冊。名稱由來。實具此兩義。然清代制度。凡屬進呈御覽之冊。冊面均爲黃色。因是統謂之黃冊。固不限戶籍一種也。

#### (四) 軍機處檔案、內務府檔案及宮中檔案

明清檔案は既に述べた如く、内閣大庫檔案、軍機處檔案、内務府檔案、及び宮中檔案の四種に大別することが出来る。内閣大庫檔案は既に述べた如くその數量は最も多い。

軍機處檔案は全部文獻館に收藏されてゐる。その卷冊は比較的系統だつてをり、よく整齊されてゐる。軍機處檔案は民國十五年一月、大高殿に移され、同二月、その檔案の整理が開始された。而してその内容は分つて二種類とすることが出来る。

#### 一、檔 冊

檔冊の種類は甚だ多い。目錄、上諭、奏議、外交、軍事、藩屬等の項を計れば八千餘冊あり。

#### 二、奏 摺

月摺とも或は摺包とも稱せらる。奏摺の數目は約八十餘萬件あり、今如し軍機處全部の檔案を合して計れば、實數は百萬件以上に達する。而してその八分の一は金融、財政、海關、釐金、

鹽務、通商、礦政、交通、捐輸等に關した摺片なるを以て、社會史、經濟史の貴重な史料といふことが出来る。「註一」

内務府檔案は全部文獻館に屬し、清の宮内宮廷生活の記載がなされてをり、皇帝の經費研究の絶好な資料であるが、その數量は比較的少く、その史的價値は比較的微なりといはれてゐる。「註二」

かく故宮文獻館所藏の明清檔案の數量は夥しく、而も著々整理されてゐたのであるが、民國二十二年二月、熱河戰勃發し、華北の時局危急を告ぐるや、文獻館は國民政府令を奉じ、院内の重要文物を上海に移して保存せんとし、上海に運んだ文物は計三千七百七十三箱の莫大な數に達した。二十二年五月以後、文獻館所有の檔案は北平、上海兩處に分存され、その整理工作は兩處に於て同時に進行せしむるの已むなきに至つた。平滬懸隔、また人員に限あり、ために整理工作上幾多の困難が伴なつたが、上海も北平も支邦事變前まで、その整理工作は相當な成績を擧ぐるに至つた。他日南遷後の平滬兩處に於ける檔案整理工作の情況、又は軍機處、内務府、宮中、清史館、刑部等の檔案に關し詳細な敘述を試みることにし、今回はこれらに關し、或は簡略に或は省略にとどめることにした。

「註一」 故宮文獻館所藏明清檔案之整理（天津大公報所載）、容媛「故宮文獻館所藏明清檔案之整理」軍機處の沿革、職掌及び其檔案の内容について張德澤氏の有益な論文がある。即ち「軍機處及其檔案」（文獻論叢所收）参照

「註二」 故宮文獻館所藏明清檔案之整理（天津大公報）、容媛「故宮文獻館所藏明清檔案之整理」参照

## (五) 結 語

明清の檔案は既に述べた如く、近代史史料の中、最も重要な史料の一つである。康乾以來、文字の獄屢々起り、その慘狀言語に絶するものありといはれてゐる。明末清初の史料に對し、當局者は何等憚らず大規模な焚燬を敢行したのである。兵部の報告によれば、乾隆三十九年より四十七年に至るまで、銷燬の次數計二十四回、書五百三十八種一萬三千八百六十二部に達した。この禁令は乾隆五十三年に至るまで嚴重に遵行されたのである。「註一」それにも拘はらず今日、明清史料の大宗ともいふべき檔案が非常に多く保存されてゐることは近代史研究者にとり寔に悻なことといはなければならぬ。然し最近の日支事變に際し、此の幾多の檔案は無事なりしや否や。今日北京に保存されてゐる檔案の數量は僅少であらう。大部分は南遷したものと思はれる。さきに上海に運ばれた多數の檔案は南京庫房の落成後、更に南京に移され、「註二」戦火をのがれ今日南京の一角に保管されてゐるものの如く考へられる。若し我が占領地域内に檔案が保管されてゐるものとせば、當然檔案整理の問題が生じてくる。かの故宮文獻館は幾多の檔案を整理し、掌故叢編、文獻叢編、史料旬刊、清代文字獄檔と續々貴重な史料を印行し、學界に貢獻せしところ蓋し甚大なものがある。南京庫房にある檔案をわれわれの手で整理することは、文化工作の一つであり、戦火より救つたといふ點からいふも、必ずしも文化侵略などといふことは出來ぬ。然

し此等の檔案が更に奥地に運ばれたならまだしも、すぐる南京の激戦で戦火の洗禮を受け灰燼に歸したとせばまた何をか言はんや。

「註一」徐中舒「内閣檔案の由來及其整理」參照

「註二」張國瑞「文獻館檔案在滬存貯及其工作之情形」中に次の如き一文あり。

迴憶本館文物檔案。自民國二十二年南遷。迄今三載有餘。在此期間。本館之整理編輯。流傳諸工作。均受重大障礙。近幸本院南京庫房落成。南運箱件。卽將自滬遷入。屆時本館準備派員。前往繼續工作。以冀將來多有所貢獻焉。



明清檔案の引用及參考書目

(一) 大庫史料目錄 六冊

旅順庫籍整理處印行

(二) 太祖高皇帝實錄稿本三種 四冊

旅順庫籍整理處印行

(三) 明季史料零拾 一冊

國朝史料零拾 二冊

旅順庫籍整理處印行 (康德元年)

(四) 史料叢編 六冊

旅順庫籍整理處印行 (康德二年)

(五) 內閣大庫書檔舊目 史料叢書の三

國立中央研究院歷史語言研究所編印 (民國二十二年)

(六) 內閣大庫書檔舊目補

中央研究院歷史語言研究所編印 (民國二十五年)

(七) 雍正硃批論旨不錄奏摺總目

北平故宮博物院文獻館編印 (民國十九年)

(八) 清軍機處檔案目錄

故宮博物院文獻館編印

(九) 辦理四庫全書檔案 二冊

國立北平圖書館印行 (民國二十三年)

(一〇) 清內閣庫貯舊檔輯刊 六冊 方甦生編

故宮博物院文獻館印行 (民國二十四年)

(一一) 滿洲老檔秘錄 二冊 金梁

(一二) 清嘉慶三年太上皇起居注

國立北京大學研究所國學門出版

(一三) 順治元年内外官署奏疏

北京大學研究所國學門出版

(一四) 清代文字獄檔 五冊

故宮博物院文獻館再版 (民國二十三年)

明清の檔案に就て (宮島)

(一五) 史料叢刊初編 十冊

東方學會印行 (民國十三年)

(一六) 掌故叢編 十冊

故宮博物院文獻館印行 (民國十七年——十八年)

(一七) 文獻叢編 二十六冊

故宮博物院文獻館印行 (民國十九年——二十四年)

(一八) 文獻叢編增刊 六冊

故宮博物院文獻館印行 (民國二十年——二十一年)

(一九) 史料旬刊 四十冊

故宮博物院文獻館印行 (民國十九年——二十年)

(二〇) 明清史料 十冊

中央研究院歷史語言研究所印行 (民國十九年——二十年)

(二一) 清開國史料考 二冊 謝國楨編

北平圖書館印行 (民國二十年)

(二二) 青季各國照會目錄 張德澤編

第一冊 英國

第二冊 美國 法國

故宮博物院文獻館印行 (民國二十四年)

(二三) 清九朝京省報銷冊目錄

第一冊 順治康熙

北京大學研究所國學門明清史料整理會印行

(二四) 北平故宮博物院文獻館一覽

故宮博物院文獻館編印 (民國二十一年)

(二五) 庫書樓記 海甯王國維

觀堂集林卷二十三所收

(二六) 大庫書檔 邵子風

甲骨書錄解題所收

(二七) 整理清內閣檔案之始末

北京大學國學季刊第一卷第一號 (民國十二年一月)

(二八) 清內閣所收明天啓崇禎檔案清擢跋 朱希祖

明清の檔案に就て (宮島)

國學季刊第二卷第二號(民國十八年十二月)

(二九) 故宮文獻館所藏明清檔案之整理 容 媛

燕京大學燕京學報第十七期(民國二十四年六月)

(三〇) 再述內閣大庫檔案之由來及其整理 徐中舒

中央研究院歷史語言研究所集刊第三本第四分(民國二十二年)

(三一) 內閣大庫殘餘檔案內洪承疇報銷冊序 李光濤

中央研究院集刊第六本第一分(民國二十五年三月)

(三二) 明清史料研究 謝國楨

金陵大學金陵學報第三卷第二期(民國二十二年十一月)

(三三) 近代中國史史料評論 陳恭祿

國立武漢大學文哲季刊第三卷第三號(民國二十三年)

(三四) 文獻特刊 故宮博物院十週年紀念

博物院文獻館印行(民國二十四年)

(三五) 文獻論叢 故宮博物院十一週年紀念

文獻館印行(民國二十五年)

(三六) 史與史料 孟森

文獻特刊所收

(三七) 中國歷代史料之來源並擬現代可以收集之方法 孟森

文獻特刊所收

(三八) 文獻館整理檔案報告 沈兼士

文獻特刊所收

(三九) 整理內閣大庫清代漢文黃冊之經過

文獻特刊所收

(四〇) 整理軍機處檔案之經過

文獻特刊所收

(四一) 整理內閣大庫滿文老檔之緣起與計劃

文獻特刊所收

(四二) 整理內閣大庫滿文黃冊之經過

文獻特刊所收

(四三) 清內閣漢文黃冊聯合目錄序 蔡元培

明清の檔案に就て(宮島)

文獻論叢所收

(四四) 禹貢學會的清季檔案 顧頡剛

文獻論叢所收

(四五) 滿文老檔之文字及史料 李德啓

文獻論叢所收

(四六) 清代檔案分類問題 方甦生

文獻論叢所收

(四七) 軍機處及其檔案 張德澤

文獻論叢所收

(四八) 總管內務府考略 曹宗儒

文獻論叢所收

(四九) 清代黃冊中之戶籍制度 王梅莊

文獻論叢所收

(五〇) 清代檔案釋名發凡 單士元

文獻論叢所收

(五一) 昇平署之沿革 吳志勤

文獻論叢所收

(五二) 清代題本制度考 單士魁

文獻論叢所收

(五三) 內閣大庫雜檔中之明代武職選簿 單士魁

文獻論叢所收

(五四) 整理內閣大庫雜亂檔案記 王梅莊

文獻論叢所收

(五五) 述滿文老檔 張玉全

文獻論叢所收

(五六) 文獻館檔案在滬存貯及其工作之情形 張國瑞

(五七) 內閣檔案之由來及其整理 徐中舒

明清史料所收

(五八) 故宮文獻館所藏明清檔案之整理

天津大公報所載 (民國二十四年四月二十日二十一日)

明清の檔案に就て (宮島)

(五五)



(五九) 論檔案 曹宗儒

天津大公報所載

(六〇) 清朝開國期の史料 内藤虎次郎

讀史叢錄所收

(六一) 清朝開國期の史料補録 内藤虎次郎

讀史叢錄所收

(六二) 最近に於ける支那の支那學 石田幹之助

「支那」第十七卷第四號所載 (大正十五年四月)

(六三) 大庫史料の整理に就て 水野 梅曉

昭和八年六月「支那」所載、「滿洲文化を語る」所收

「昭和十四年八月二十五日」